

「令和7年度やまがた避難者支援協働ネットワーク意見交換会」 及び「第111回支援者のつどい」概要（結果報告）

意見交換会及び支援者のつどいを、下記のとおり開催した。

日 時	令和7年7月30日（水）13：00～16：00
場 所	山形県産業創造支援センター 多目的ホール （山形市松栄1丁目3－8）
出 席 者	やまがた避難者支援協働ネットワーク会員 15団体23名

○ 第1部、第3部「意見交換会」

出席者が4グループに分かれて意見交換を実施した。

【意見交換会で出された主な意見】

- ・避難生活の長期化に伴い、避難者が抱える悩みが多様化しており、複数の機関が連携して支援していくことが求められる。その際には、支援機関同士が避難者支援に関する情報交換をしておく等、普段からの関係づくりが重要となる。
- ・一人の支援者が、避難者からの相談をすべて抱え込み、解決しようとせず、周りの人や他の支援機関に協力を求めるべき。
- ・避難者の方から相談をされた際、何かアドバイスをしたいと思うが、支援者の価値観の押し付けになってしまうと考え、話ができないという葛藤を抱えている。
- ・喪失で悩みを抱えている方への声かけは本当に難しく、気を付けて発言するようにしているが、それでも「あの時の言葉で傷つけていないだろうか」と不安になる。
- ・避難者のことをよく知っている支援者による対応の方がスムーズなことが多いものの、事情を知らない新任の支援者の方に相談しやすい場合もあるようだ。

○ 第2部「第111回支援者のつどい」

講演 「誰でもできるグリーフサポート～喪失体験との向き合い方～」

講師 医療法人社団爽秋会 岡部医院仙台 医師 佐藤 悠子 氏

内容

- ・喪失体験後に生じる「グリーフ（悲嘆）」は、誰にでも起こりうるストレス反応であるが、中には専門的な治療介入が必要な状態の方もいる。
- ・東日本大震災では、家族が行方不明、自宅が避難元に残っているが立ち入ることができない等の「あいまいな喪失」によって、グリーフ反応が起こった。
- ・グリーフサポートにおいて、相手を傷つける可能性のある言葉を知ることが大切である。相手の状態によっては、無理に言葉をかけず、そっと寄り添うことも大きなサポートとなる。
- ・誰かのために頑張ると心身共に消耗するため、支援者は「好きなことリスト」を準備してリフレッシュする等、セルフケアを意識して行うことが重要となる。
- ・今後、支援を必要としているにもかかわらず、グリーフケアの場に出てこない方々をどのように支援につなぐかが課題となっている。

以上